

## 当院の臨地実習と学生教育のこれから

◎藤木 翔太<sup>1)</sup>  
藤田医科大学病院<sup>1)</sup>

## 1. 当院の実習について

藤田医科大学病院では、藤田医科大学医療科学部医療検査学科3年生の約100名の臨地実習を受け入れています。3年生の臨地実習期間の2か月間の内、半分は当院で、残りの半分は外部の医療機関で実習を実施しています。当院では学生を1班7～8名のグループに分け、検体検査（血液・一般、化学免疫、微生物）生理検査（心電図、脳波筋電図、超音波検査）特殊検査（輸血、病理、救命検査）の中から1部署ずつ、計3部署を実習で回ります。そのため輸血部に回ってくる学生は全体の1/3程度となります。実習期間は1部署に対し8日間です。実習には当検査部教育委員会が主として作成しているテキスト『実習必携』を用います。

『実習必携』には、各検査の原理や自動測定機器の説明のほか、事前学習となる穴埋め問題や、実習後に提出するレポート課題などが書かれています。

## 2. 輸血部での実習について

輸血部の臨地実習では、血液製剤の保管管理から出庫までの製剤管理業務と血液型検査などの輸血関連検査業務を学びます。さらに術中緊急輸血などに迅速に対応するためサテライト輸血部を設置しており、手術室内でも実習を行っています。実習のスケジュールは、午前中に製剤管理業務と検査業務、更に手術室内にあるサテライト輸血部の見学に分かれて実習を行います。製剤管理業務では製剤割付や払出などの業務を技師の指導のもと行い、輸血検査業務は各種検査の見学や自動測定機器の説明などを行い、実際に試験管法による血液型検査を経験してもらいます。手術室内サテライト輸血部の実習では、実際に手術室内に入り、術中輸血の払出、人工心肺装置、手術支援ロボットの見学や、緊急輸血に対する講義をしています。

午後の実習の始まりには、3分プレゼンテーションを実施します。これは、当日午前中に実習で学んだことを各個人が3分間にまとめて班の学生に発表するものです。学んだ知識を3分間にまとめて話すことで、プレゼンテーション能力を高め、さらに、知識をグループ内で共有することが出来ます。また発表後には、必ず質問か感想のどちらかの発言を聞き手の学生から行うことにより全員が集中して話を聞き、疑問の解決にも役立っています。その後は講義及び輸血部で作製した模擬検体を用いた実習を行います。輸血検査の原理についての講義や不規則抗体の紙上同定のほか、凝集の見方から、血液型検査、不規則抗体検査や交差適合試験に至るまで幅広く実施しています。

講義や実習に加え、少人数グループに分かれて症例を基にした予期せぬ反応の対応について、ホワイトボードにまとめて発表させています。なるべく学生が自身の問題として考える機会を増やし、少人数で解かせることにより実習への自主性をもって積極的な参加を促しています。輸血部での実習の最終日は症例発表会を行います。実習初日に学生1人ずつにランダムに症例を渡し、輸血部での実習期間中にスライド作成してもらいます。ただし目的は問題をただ完璧に解くことだけではなく、自分で調べて考えをまとめ、発表することにあります。そのため発表前日までに輸血部の技師が内容をチェックしアドバイスや修正を行い、決して学生まかせではなく、技師が指導しゴールまで導くことができるようにしています。また、実習による教育効果を確認する目的で実習初日と最終日にはテストを実施しています。この問題は輸血に関する知識や基礎免疫、計算問題などが主で、両日とも全く同じ問題になっています。学生の評価目的ではなく、技師の指導方法の評価を目的としています。学生自身も実習期間の成長が実感できるという副次的な効果が得られました。

本講演では、当院の臨地実習の具体的な方法を挙げ、今後の臨床検査技師養成の教育のあり方についても言及したいと思います。

連絡先 (0562-93-2314)